

令和5年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

- 高い志と夢を持ち、「知・徳・体」の調和のとれた、21世紀を担うことのできる有為な人材を育てる。
- 1 豊かな人間性を持ち、国際感覚に富んだ、社会に貢献できる人材を育成する学校
 - 2 社会の変化に迅速に対応できる機能的な組織運営に努め、他の学校の模範となる先進的な学校
 - 3 生徒、保護者、地域社会からの期待に応え、信頼される学校

2 中期的目標

- 1 豊かな人間性を持ち、国際感覚に富んだ、社会に貢献できる人材を育成する。
 - (1) 進学を重視した全日制普通科単位制高校として、これまで培ってきた本校の取組みの着実な維持とさらなる発展を図る。
 - ア 新学習指導要領や高大接続改革への対応、生徒の進路実現を常に意識したカリキュラムマネジメント、「指導と評価」の研究等を行なうことで、社会で活用できる「知識・技術」の習得、未知の状況に対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養に努める。
 - ※令和7年度において、学校教育自己診断(生徒)における「授業で自分の考えをまとめたり発表する機会がある」を90%にする。(R2：84%、R3：87%、R4：83%)
 - イ 本校での学習活動のみで、国公立大学や難関私立大学への現役合格に必要な学力を育成する。
 - ※令和7年度において、国公立大学現役合格者20%以上とする。(R2：10.3%、R3：15%、R4：12%、)
 - ウ 土曜講習、長期休業中等の講習、週末課題等の内容を精査・改善し、進路実現のための基礎固めを図る。
 - ※令和7年度において、一日平均学習時間(2年生10月)110分以上。(R2：107分、R3：108分、R4：94分)
 - エ 「槻の木NEXT STAGE」(企業訪問、高大連携、国際交流・海外研修、地域連携など)の取組みや体験・発表型学習によって、思考力・判断力・表現力等を育成し、社会で力強く活躍することができる力や人間性の涵養に努める。
 - (2)「規範なくして学力向上なし」を合い言葉に、高い志や倫理観と強い精神力を育て、学業と学校行事・部活動の両立のための支援と指導を行なう。また、安全安心に学校生活がおくれる環境を維持、発展させる。
 - ア スクールモットーである「あたりまえのことをあたりまえに」の実践をあらゆる場面で生徒に求め、学業と部活動・学校行事・生徒会活動等を両立できる文武両道の逞しい生徒を育てる。
 - ※令和7年度において、遅刻者数府内最少レベルを維持する。
 - イ すべての教育活動を通じて安全で安心な学校を作り上げ、規範意識、自尊感情、人権意識の向上に努める。
 - (3)グローバル社会で活躍できる「知・徳・体」の調和のとれた人格の育成をめざし、学校行事、生徒会活動、部活動、「槻の木NEXT STAGE」等の取組みにより、社会で通じる礼儀やマナーを身につけさせるとともに、主体性、自尊感情、人間関係調整力を育てる。
- 2 社会の動きに即応できる機能的な組織運営に努める。
 - (1) 機能的な組織運営による学校力の向上をめざし、授業改善、生徒指導、進路指導の充実に取り組む。
 - ア 教員相互の授業見学、授業アンケートを効果的に活用し、授業改善に取り組む。
 - イ 先進校視察、府教育センター研修などへの積極参加と研修成果の校内伝達などにより、教育力の向上と活性化を図る。
 - (2) 1人1台端末やオンラインを活用した授業、学習支援を推進するなど、緊急時においても学びが保障される体制の充実を図る。
- 3 生徒、保護者、地域社会からの期待に応え、信頼される教育活動を推進する。
 - (1) 生徒や保護者が本校を誇りに思い、地域社会からも信頼される教育活動を推進する。
 - (2) 広報活動、情報発信の充実に努め、本校への理解と協力、連携が得られる取組みを推進する。
- 4 校務運営の効率化と働き方改革を推進する。
 - (1) ICTによる校務の効率化を進め、教員がより多くの時間、生徒対応できるよう、業務のスクラップ&ビルドを進める。
 - (2) 働き方改革の趣旨を踏まえ、同僚性が自然に発揮され、教職員全員で効果的・効率的に校務に取り組む協働体制を構築するとともに、常に社会や学校を取り巻く情勢の変化に迅速に対応できるよう改善に努める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和5年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
1. 学力及び学びに向かう力のさらなる向上と進路実現 ・「この学校では、到達度の低い生徒に対する学習指導について、全校的課題として取り組んでいる。」(教職員)63.6%(昨年度78.6%)についての数値は下がっている。 取組み状況は変わらないが、現1年生では入試倍率の低下により該当する生徒が他学年より多く、結果として課題の残る生徒が増えているという認識からと推測する。 ・指導内容について、他の教科の担当者と話し合う機会がある。」(教職員)63.6%(昨年度50.0%)「思考力を重視した問題解決的な学習指導を行っている。」90.9%(昨年度71.4%)「生徒の実態をふまえ、参加体験型の学習を行うなど、指導方法の工夫・改善を行っている。」(教職員)90.9%(昨年度78.6%)「年間の学習指導計画について、各教科で話し合っている。」(教職員)92.9%(昨年度80.8%)「生徒の学習意欲に応じて、学習指導の方法や内容について工夫している。」(教職員)90.9%(昨年度78.6%)「評価の在り方について話し合う機会がある。」(教職員)81.8%(昨年度71.4%)と上昇傾向にある。 教員相互の授業見学、研究授業・研究協議とまとめの共有、授業アンケートや観点別評価についての検討等を継続的に実施している結果である。 ・「この学校は、情報リテラシーや情報モラルを高める教育に取り組んで	【第1回 令和5年6月17日】 ◆「土曜講習」および「学校説明会」の見学 ◆「令和5年度学校運営協議会名簿」「学校運営協議会 実施要項」「令和5年度学校経営計画及び学校評価」「スクール・ミッション(設置者案)」「スクール・ポリシー(案)」について、確認及び審議 ・この学校は規律ある進学校であるので、この方針を続けてほしい。 ・スクール・ミッションの中に「槻の木高校らしさ」をもう少し前面に出してほしい。 ・「規律のある」の説明をもう少し示してほしい。 ・「グローバル社会で活躍する」についてはどの高校でも言っているので、槻の木のらしさが見えてこない。 ・学校経営計画の「家庭の学習時間」、「遅刻者数」、「進路実績」については、もう古い。槻の木のらしいもの、新しいindexを作してほしい。 ・アドミッション・ポリシーでは、槻の木高校の生徒は、コツコツ勉強するタイプが向いている。まじめな生徒が、ある瞬間に学力がぐっと伸びる生徒が多いような気がする。 ・総合的な探究の時間や主体的な体験、生徒会活動の記載が少ないのももう少し付け加えるとよい。 【第2回 令和5年10月21日】 ◆「令和5年度学校経営計画」進捗状況、「令和6年度の教科書採択」について、説明及び審議 ・教員も生徒もやらないといけないことがたくさんあり、処理しきれっていないことがある

府立槻の木高等学校

いる。」(教職員)63.6％(昨年度 78.6％) となっている。 教育機会等は変わらないが、1 人 1 台端末を含め、生徒の ICT 機器活用、SNS 利用の拡大から、現状では十分ではないと認識する教職員が増加したことが要因と考えられる。日々の授業等において、生徒の意識をさらに高める取組みを推進していく。 ・生徒の授業に関する評価は昨年度から変化はない。 ・「学校は、保護者の願いに応える努力をしている。」(保護者) 74.1％(昨年度 89.6％) 昨年 1 /25(水)降雪時のこと、今年の大雨警報発令時に関し、厳しいご意見を少なからずいただいております、その結果と思われる。能登半島地震の発生もあり、南海トラフ地震の発生も想定し、折に触れ、防災・減災教育を充実させていく。 2. 規範意識、自尊感情、人権意識の向上 ・「学校は、生活規律や学習規律などの基本的習慣の確立に力を入れている。」は生徒 92.6％(昨年度 93.5％) 保護者は 93.6％(昨年度 92.6％) 「規律を守った生活を送っている」は生徒 93.5％(昨年 94.8％)、保護者 94.6％(昨年 93.7％) 「先生は、まちがった行動を正す指導をしてくれる。」92.0％(昨年度 91.4％) で、高い評価を維持できている。 ・「学校はいじめなど私達(子ども)が困っていることに真剣に対応してくれる」は生徒 87.6％(昨年度 85.8％)、保護者 88.3％(昨年度 85.2％)、 「先生は、自分の悩みに親身になって応じてくれ、気軽に相談ができる。」(生徒)81.2％(昨年度 77.1％) 「先生は、生徒の意見を聞いてくれる。」(生徒)82.6％(昨年度 84.2％) で、全ての項目で上昇している。 ・「今年の体育大会は、良かった。」は生徒 86.5％(昨年度 86.1％) 「今年の文化祭はよかった」は生徒 85.7％(昨年 85.6％)。「修学旅行の内容は充実している」は生徒 91.8％(昨年度 92.3％) で、体育大会・文化祭の満足度は高い。修学旅行に関しても、満足度が高い結果となった。次年度の修学旅行先はコロナ前の沖縄に戻すことでより高まることが期待できる。 3. 学校力の向上 ・学校経営ビジョンの明確化、進捗状況の共有、教職員の協働体制の推進、研修の充実等については「中期的（3 か年）な目標を踏まえ課題を明確にした「学校経営計画」を策定し、PDCA サイクルによる学校経営を推進している。」(教職員) 45.5％(昨年度 78.6％) 「校長は自らの教育理念や学校運営についての考え方を明らかにしている。」(教職員) 63.6％(昨年度 85.7％) 「学校運営に校長のリーダーシップが発揮されている。」(教職員) 45.5％(昨年度 85.7％) 「教職員の適性・能力に応じた校内人事や校務分掌の分担がなされ、教職員が意欲的に取り組める環境にある。」(教職員)54.5％(昨年度 78.6％) 「日々の教育活動における問題意識や悩みについて、気軽に相談し合えるような職場の人間関係ができています。」(教職員)63.6％(昨年度 85.7％) 校長として、学校の現状と課題、環境要因等の分析に注力したが、十分な発信ができなかった。次年度はしっかり発信し、教職員が一体となり課題解決に取り組みたい。 ・「この学校では、府教育センター等が主催する研修に計画的に参加する体制が整っている。」(教職員)81.8％(昨年度 71.4％) 「初任者等、経験の少ない教職員を学校全体で育成する体制がとれている。」(教職員)81.8％(昨年度 57.1％) と上昇している。 ・昨年度、アンケート用紙配付を廃止し、フォーム作成ツールを活用した結果、回収率が下がった。本年度は保護者分について、アンケート用紙配付に戻した。保護者の回収率は上がったが、アンケートの中でフォーム作成ツールによる実施を望んでいる意見もあり、次年度はフォーム作成ツールによるアンケート実施に向けて準備を行っていく。	と思われる。 ・アンケート結果として、授業中集中しているかは 93.4％という驚異的な数値であるが、一方、予習や復習については約 2 割の生徒ができていない。このところをしっかりと見ておかないとバーンアウトしてしまう恐れがある。この時どうしていかないといけないかを考えておく必要がある。 ・今は「どんな学力をつけないといけないか」をアップデートしないといけない。今までの槻の木高校とはそこが変わってきていると思う。学力観をアップするには授業観の見直しなどをしないといけない。大阪の入試問題、チャレンジテストは授業の場面を切り取ったテストになってきている。そのような学力観のアップデートや授業観の見直しをしないといけない。そうすることで目標標準評価につながる。この評価は測定評価ではなく、教育論であるので、総合学習や支援教育、など様々な教育場面に変化していく。 ・教員はファシリテーターの役割に変化していかないといけない。生徒自身が授業を作り上げる。そのような授業展開をしていくべきである。 ・今、槻の木高校は逆風の時、槻の木の強みは何なのかをもう一度考えていかないといけない。槻の木の強みは「厳しさ」。しかし、この厳しさは「みんなでしっかりやろう」という事であるので、「厳しいこと」ではない。 ・教員を育てるとき、教員は放っておくと校内はバラバラになっていく。校長として、同僚性をいかに高めるか。教員は授業を「見る」・「見られる」の環境で育つ。 ・中学校との連携も継続してほしい。 【第 3 回 令和 6 年 2 月 9 日】予定 ◆「授業見学」 ・ペアワークや ICT を使用にて、非常にわかりやすい授業だった。しかし、少し簡単すぎるのではないかと感じた。大学入試（特に共通テスト）では思考力を解く問題が増加しているので、もう少し考えられる授業を増やしたらどうか。 ◆「令和 6 年度学校経営計画」の承認及び協議 ・高槻市の出生数を見ると 10 年先の子供の数が 1000 人減少している、公立小中学校での影響（学校や教員数の減少等）持続可能な学校経営を考えないといけない。10 年ごとに学習指導要領が変更されているが、今回は学力観のアップデートや学校全体、教員の意識も変化していかないといけない。 ・国の学校教育審議会の流れで、普通科の改革が大事な局面を迎えている。同時に民間企業も激動改革の時期である。この変化を教育現場は生徒にどう教えていくかが弱い。生きる力、探究力、このあたりの教育をもう少し力を入れてほしい。これが社会につながると考えている。これが今後の新しい普通科の課題になっている。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標【R4年度値】	自己評価
1 社会に貢献できる人材を育成する	(1) 学力及び学 びに向かう 力のさらな る向上と進 路実現を支 援する	(1) ア・新学習指導要領を踏まえて、社会で活用できる「知識・ 技術」の習得、未知の状況に対応できる「思考力・判断 力・表現力」の育成、学びを人生や社会に生かそうとす る「学びに向かう力・人間性等」の涵養のため、「主体的・ 対話的で深い学び」の実現をめざして授業改善を進める。 ・生徒1人1台端末など、ICT 機器の積極的な活用をいっ そう推進する。 ・新学習指導要領に係る適切な教育課程の編成・実施、観点 別学習状況の評価を適切に行う。 ・生徒の学力を、学力生活実態調査等で分析し、生徒面談 の充実を図る等して、進路実現を支援する。 ・キャリアパスポートを活用して職業観、勤労観育成のた めの取組みを行うとともに、校内での進路別説明会を行 う等して進路指導の充実を図る。 イ・自学する意義をHR や学年集会等で啓発し、課題、予習、 復習等に進んで取り組ませ、学習時間の確保とその定着 を図る。 ・学校図書館の更なる活用等を通じて読書習慣や自習習 慣の定着を図る。 ウ・「槻の木 NEXT STAGE」の取組みを継続し、企業、大 学、地域と連携した体験・発表型進路学習を行う。	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)で「カリキュラ ムに係る満足度」85%以上を維持す る。【87%】 ・学校教育自己診断(生徒)で「授業満足 度」を80%以上を維持する。【81%】 ・学校教育自己診断(生徒)における「授業 で自分の考えをまとめたり発表する機 会がある」を85%以上。【83%】 ・学習指導室(進路、教務)、学年、教科 が協力して、進路実現を支援する。 ・国公立大学現役合格 15%以上。 【12%】 ・面談回数年間総数 2160 回以上を維 持する。【約 2400 回】 ・学校教育自己診断(生徒)で「進路につ いて考える機会がある」90%以上を 維持する。【96%】 イ・一日平均学習時間2年(10月)、平日・ 休日平均 110 分以上。【94 分】 ウ・参加生徒の満足度 90%以上を維持す る。【100%】	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)で「カリキュラムに係る満足度」は 88% (○) ・学校教育自己診断(生徒)で「授業満足度」80% (○) ・学校教育自己診断(生徒)で「授業で自分の考えをまとめたり発表す る機会がある」84% (△) ・教員相互の授業見学、研究授業・協議、授業アンケートや観点別評 価についての検討を継続的に実施した ・生徒1人1台端末の活用等では、思考力・判断力・表現力を高める 取組み、協働学習を取り入れた授業が増えた。 ・啐啄サポート(国公立大学希望者への面接指導)を1人当たり年5 回実施した。国公立大学現役合格 11% (△) ・科目選択、学習状況等の個別面談、キャリアパスポートを活用した 進路面談等、年間総数 2400 回 (◎) ・学校教育自己診断(生徒)で「進路について考える機会がある」 93% (○) イ・一日平均学習時間2年(10月)、平日・休日平均 86 分 (△) 週末課題(1・2年英国数)、週テスト(2年英語)、毎日の学習 計画表の提出、自習室活用推進等を行っているが、2年(10月) の家庭学習時間、平日 77 分(昨年 83 分)、休日 107 分(昨年 121 分) 102 分と減少している。コロナ禍の影響緩和により部 活動が活性化によるところもあるが、継続的な家庭学習の必要性 を示していく。 ・5 回の図書館だよりの発行、掲示を行い(1月 12 日現在)、読書 習慣の推進を図った。 ウ・大阪公立大・近畿大訪問、立命館大学留学生交流、東北大教授の 特別講演等を実施。満足度 100% (◎)
	(2) 高い志の育 成と規範意 識、自尊感 情、人権意識 の向上を図 る	(2) ア・遅刻防止週間を設定する等、遅刻指導を充実し、遅刻数 の府内最少レベルをめざす。 ・生徒の安全確保のため、自転車指導等の交通安全週間を 設け、指導の充実を図る。 ・学校美化や教室清掃を習慣とし、学びの場としての学習 環境整備に努める。 ・生徒1人1台端末の活用推進とあわせて、利用ルールの 順守等、情報リテラシーの育成にも力を入れる。 イ・保健課を中心に関係教員が情報を共有し、スクールカウ ンセラーや関係機関との連携を推進して、一人ひとりの 教育的ニーズに応じた支援を行う。 ・新型コロナウイルスなど感染症に係る対応体制を整える と共に、安全で安心な学校づくりを推進する。 ・人権意識の向上、教育相談活動の充実について、専門人 材を活用した教職員研修等を実施し、指導力の向上を図 る。	(2) ア・年間遅刻者数 1000 人以下。 【1566 人】 ・学校教育自己診断(生徒)で「規律を守っ た生活を送っている」95%以上を維持 する。【95%】 イ・保健課を中心とした適切な教育相談体 制による支援の継続。 ・教職員研修を、人権意識の向上、教育 相談活動の充実について各々実施す る。 ・学校教育自己診断(教職員)で「人権 尊重に関する様々な課題や指導方法 について、全教職員で話し合ってい る。」70%以上。【50%】	(2) ア・遅刻防止キャンペーンの実施回数等により改善を行ったが、遅刻 者数 1503 人 昨年同時期より増加 (△) ・学校教育自己診断(生徒)で「規律を守った生活を送っている」 94% (△) ・定期的な自転車点検を含めた交通安全指導を行っているが、車体重 量の大きい電動アシスト自転車の利用の増加もあり、転倒も含め 事故が増加している。 イ・不登校等をテーマに、スクールカウンセラー(SC)による教員研 修及び交流会を実施、また、配慮の必要な生徒の教育 的ニーズを教員間で共有した。 ・専門人材講師による職員生徒合同救命救急(AED・エビペン)研 修(教員・生徒)を実施した。 ・学校教育自己診断(教職員)で「人権尊重に関する様々な課題や 指導方法について、全教職員で話し合っている。」55% (△) 職員人権研修等の内容を精査し、人権意識向上に努める。
	(3) グロ ー バ ル 人 材 の 育 成 を 推 進 す る	(3) ・「槻の木 NEXT STAGE」の一環として国際交流に取り 組む等、国際的な視野を育て、使える英語力の向上を 図る。 ・学校行事、生徒会活動、部活動、「槻の木 NEXT STAGE」等の取組みにより、主体性、自尊感情、人間 関係調整力を育てる。	(3) ・姉妹校相互訪問、Web 交流など、国 際交流企画等を実施する。 ・学校教育自己診断(生徒)で「学校行 事に係る肯定的回答」85%以上。 【86%】	(3) ・台湾陽明高校とのオンライン交流、オーストラリア研修、タイ姉妹 校との相互訪問を実施した。満足度 100% (◎) ・学校教育自己診断(生徒)で「学校行事に係る肯定的回答」 87% (◎) ・2年修学旅行の内容について、肯定的な回答は92%。
2 社会の動きに即応できる機能的な組織運営に努める	(1) 機能的な組 織運営によ る学校力の 向上を図る	(1) ア・教科会を定期的に開催して教科研修を行い、授業力の向 上を図る。 ・研究授業、教員相互授業見学、教員研修を行う。 ・授業アンケート結果を効果的に活用し、授業改善に取り 組む。 イ・先進校視察、府教育センター等の研修への参加と伝達研 修、教職員研修、経験年数の少ない教員へのスキルアッ プ研修等により、授業力、人権意識など、総合的な教育 力の向上と組織の活性化を図る。 ・日常的な OJT の推進に努め、経験年数の少ない教職員の 育成体制の充実を図る。 ・カウンセリングマインドのある生徒指導を推進する。	(1) ア・教員相互の授業見学、授業アンケート 結果を踏まえた教科会での協議を全教 科で年間2回実施。 イ・伝達研修、教職員研修の実施。 ・学校教育自己診断(教職員)で、「研修 内容に係る肯定的回答」85%以上。 【64%】 ・学校教育自己診断(生徒)で、「生徒指導 は納得できる」80%以上。【69%】	(1) ア・各教科で前期後期に1回ずつ研究授業を行い、その後報告研修を実 施し、全教職員で共有した。(○) イ・伝達研修、教職員研修の実施。 ・学校教育自己診断(教職員)で、「研修内容に係る肯定的回答」は 64% (△) であるが、大教大と教職コンソーシアム連携事業「教 師の学び舎」への参加、次年度 JICA 海外協力隊への参加など、 意欲のある教職員は増加している。 ・学校教育自己診断(生徒)で、「生徒指導は納得できる」71% (△) 生徒の状況や事案の背景を踏まえた丁寧な指導が必要である。
	(2) 緊急時にも 学びが保証 される体制 を構築する	(2) ・新型コロナウイルス感染症対策など、あらゆる危機管理 事案に対し即応できる組織体制を構築する。	(2) ・保健課を中心とした防犯防災体制確 立とあわせて、情報課を中心に、緊急 時におけるオンライン授業の速やか な実施や、生徒1人1台端末の活用な ど、緊急時即応体制を構築する。	(2) ・今年度は未実施であるが、1人1台端末を活用した授業配信環境 は構築済みである。(○) ・大規模災害発生時の安否確認等について、フォーム作成ツール等を 用いて行うことを想定している。(○)

府立槻の木高等学校

3 生徒・保護者・地域からの信頼される学校づくりを推進する	(1) 生徒、保護者、地域から信頼される学校づくりを推進する (2) 保護者・地域からの協力や連携の強化を図る	(1) - 授業公開、体育大会、文化祭、個人面談、進路説明会、PTA 活動等を通じ、保護者の信頼をさらに得るよう努める。 - 施設設備の改善に努め、学習環境の充実を図る。 - 学校教育自己診断結果等を分析し、保護者や地域社会から期待され信頼される学校づくりがすすんでいるか検証する。 (2) - 学校教育活動の全般について、ホームページやメールマガジンなどを通して、本校生徒・保護者、中学校、中学生・保護者、地域に発信し、学校への協力や連携が得られる環境づくりをすすめる。	(1) - 学校教育自己診断「充実した学校生活を支えてくれる雰囲気がある」生徒 85%以上を維持する。【88%】、保護者 85%以上。【83%】 (2) - ホームページの適宜更新。 - メールマガジンのタイムリーな発信。	(1) - 学校教育自己診断「充実した学校生活を支えてくれる雰囲気がある」生徒 88% (○)、保護者 76% (△) - 保護者について、フォーム作成ツールを用いた昨年度は回答数が 177 と大変少なかった、今年度は一昨年度と同様の紙様式で実施した。回答数は 627 となったが、結果として、経年比較が難しくなってしまった。 - 保護者の肯定的な回答は昨年度を下回ったものの、体育大会、文化祭に、多くの保護者、中学生（文化祭）が来場した。 - 昨年度は参加できなかった 2 地区交流 PTA ソフトバレーボール大会に参加、実施できていなかった社会見学会も実施できた。(◎) - 花植え、ボランティア清掃などに、多数の保護者が参加した。(○) (2) - 学校説明会 9 回（午前・午後の 2 部制）実施した。 - 校長ブログの掲載更新は 125 回 (◎) - 部活動ブログの起案・承認を簡素化し、更新数が上昇した。(◎) 14 回(10 月末)→40 回 - メールマガジン（金曜日）発信状況 50 回 (○) - 保護者宛てメール（週 1 回）にて配付物等の連絡 (○)
4 同僚性を高め、協働が推進される体制をつくる。	(1) 校務運営の効率化や、業務の見直しを図る。 (2) 同僚性を高め、協働が推進される体制をつくる。	(1) - ICT 機器の活用を進め、教材の準備の効率化、会議時間の短縮などを行い、教職員が生徒に向き合う時間を確保する。あわせて、業務の見える化、業務分担の見直し・平準化など、校務運営の効率化を推進する。 - 全校一斉定時退庁日の設定や校務運営の効率化等により時間外勤務の削減を図り、働き方改革をいっそう推進する。 (2) - コミュニケーションがとりやすい風通しの良い職場環境を作り、同僚性が自然に発揮され、効果的・効率的な協働が進む組織づくりをすすめる。	(1) - 学校教育自己診断（教職員）で、「教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に活かしているについての肯定的回答」80%以上。【71%】 - 時間外勤務月 80 時間以上の職員の半減、100 時間以上の職員をなくす。【80 時間以上平均 7.1 人・100 時間以上平均 2.6 人】 (2) - 学校教育自己診断（教職員）で、「教職員間の相互理解についての肯定的回答」85%以上。【71%】	(1) - 学校教育自己診断（教職員）で、「教育活動全般にわたる評価を行い、次年度の計画に活かしているについての肯定的回答」82% (○) - 時間外勤務月 80 時間以上の職員平均 9.7 人・100 時間以上の職員平均 3.3 人 (△) - 学校運営の効率化の推進が喫緊の課題である。 (2) - 学校教育自己診断（教職員）で、「教職員間の相互理解についての肯定的回答」64% (△) - 日々の教育活動についてゆとりをもって検討できる時間を確保することが必要である。